

■ 論 文 ■

## パッケージ化される開発援助とごみの「穴」をめぐる生活変容 ーネパール・キルティプル市における生活改善プロジェクトを事例としてー

葛 西 映吏子

(関西学院大学大学院社会学研究科研究員)

■ 要 旨 ■ 本稿は、ネパール連邦民主共和国・カトマンズ盆地において、ごみ問題の解決を目指して行われる生活改善プロジェクトが引き起こす、ローカル社会の生活変容について述べる。

「ごみ」をめぐる問題は、万国共通の環境被害や身体的被害を引き起こす問題であるが、発生する原因は当該社会に特有の社会的文化的背景に密接に関わる問題であることが多い。しかし、世界中で展開されるごみ管理プログラムでは、どの地域、どの文化に対しても共通のパッケージ化されたプログラムが持ち込まれ、当該社会特有の文脈はほとんど顧みられることはない。グローバル規模で行われる生活改善プロジェクトは、ローカル社会の何を変えようとし、どのように受け入れられ、どのような結果をもたらしてきたのだろうか。

キルティプル市の旧市街地に残る、サガーとナウガーという「穴」の利用と管理のあり方、あるいは「ケガレ」感覚に関する様々な規範についての語りから明らかになるのは、その「穴」がもつ多層的機能であった。援助という善の介入によって、多層的な場をめぐる実践が、一概に「ごみ問題」として語られ、生活から切り離されてきたということ、そしてその結果として生活文化の漂白が起こりつつあるということを指摘する。つまり、ネパールにおける生活改善プロジェクトは、経済的な援助依存だけでなく社会システムの依存もやむなくしてきたのである。

■ キーワード ■ 援助、生活改善、ごみ問題、生活文化、ネパール

### 1. はじめに

ネパール連邦民主共和国（以下、ネパール）、とくにカトマンズ盆地内の都市において、ごみ問題は年々深刻さを増している。特に 80 年代以降、加速する生活の近代化や大量の商品流入によって、ごみは急増した。現在もごみ収集や埋立地のトラブルによって、空き地や川辺に投棄されたごみが道端に数日間放置され、悪臭を放つという問題が毎月のように発生している（eKantipur, Nepal-news.com 2012）。

ネパールで実施されてきた、海外からの支援によるごみ管理プログラムは、主にごみの分別収集

と家庭ごみの堆肥化である。しかしこうした支援は、しばしば現地における生活との間に齟齬が見られる。カトマンズ市に隣接する第2の都市パタン市で、家庭ごみの堆肥化プロジェクトが実施された際にもこうした齟齬は顕著に現れた。食べ残しや野菜くずなどのごみをコンポストビンに捨てて堆肥化し、リサイクル意識を喚起するというプロジェクトは、「ケガレ」意識にもとづく忌避感覚の強いネワール人たちにとって、簡単に受け入れられるものではなかった。山上亜紀（2007）が事例で報告しているように、人々は、食べ残しを捨てたコンポストビンをも最も神聖な場所である台所や屋上に置くことに忌避感を示したのである。

「ごみ」をめぐる問題は、万国共通の環境被害や身体的被害を引き起こす問題であるが、発生する原因は当該社会に特有の社会的文化的背景に密接に関わる問題であることが多い。当然ながら、その問題の解決も社会的規範や文化に配慮せずにはなしえないであろう。しかし、世界中で展開されるごみ管理プログラム（Waste Management Program）では、どの地域、どの文化に対しても共通のパッケージ化されたプログラムが持ち込まれ、当該社会特有の文脈はほとんど顧みられることはない。

グローバル規模で行われる生活改善プロジェクトは、ローカル社会の何を変えようとし、どのように受け入れられ、どのような結果をもたらしてきたのだろうか。

本稿は、ネパール・カトマンズ盆地において、ごみ問題の解決を目指して行われる生活改善プロジェクトが引き起こす、ローカル社会の生活変容について述べる。

キルティプル市は、1970 年台から急速に人口が増え始めた農村であり、1980 年台半ばごろから、居住地が拡大され商店街が形成された。ネパールには 100 以上の民族がいるとされるが、カトマンズ盆地には先住民族であるネワール人が多く居住し都市文化を築いてきた。

都市におけるネワール人の住居は、隣接する家々が密接して建てられており、多くの場合、住居には家庭からでる「ごみ」を捨てる「穴」があった。サガー（Sa : Ga:）、ナウガー（Nau : Ga:）と言われるその穴は、単にごみを捨てる場所ではなく、肥料をつくり田畑へと還元する生活システムの一部であった。このような生活システムはカトマンズ市やパタン市ではほとんど残されていないが、キルティプルの旧市街地では約 3 分の 1 程度の住居に残され、使用されている。

キルティプルは、カトマンズ、パタン、バクタプルに続く都市とされるが、他の都市と比べると 20 年ほど遅れて近代化がはじまったと言われる。現在、カトマンズ市やパタン市では、ごみは分別されることなくビニール袋に詰め込まれ、市のトラクターで一気に回収し、中間処理場で分別す

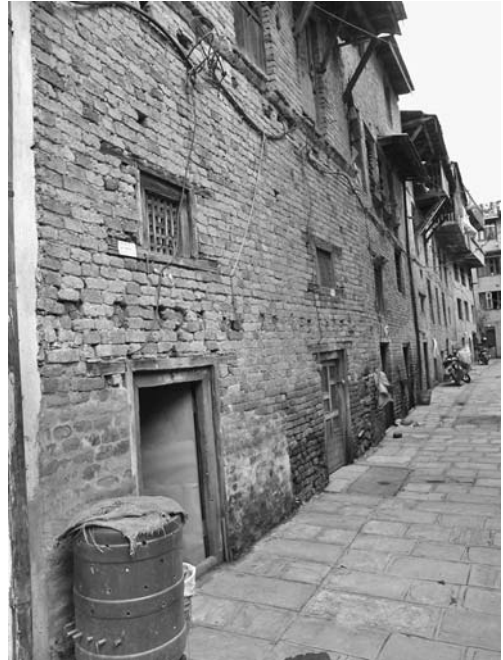


写真 1 家の前に置かれたコンポストビン

るという方法がとられている。一方、キルティプル市では様々な支援機関が介入しつつ、いまだごみ管理のあり方を模索しているという状況にある。

本稿では、サガーやナウガーの利用と管理から、あるいは「ケガレ」感覚に関する様々な規範から見えてくる「ごみ」が、パッケージ化された生活改善プロジェクトにおいて一概に「ごみ問題」として語られ、生活から切り離されてきたということ、そしてその結果として生活文化の脱文脈化が起こりつつあるということを指摘する。

## 2. 開発援助と文化

開発援助に関する研究の開始時期は 1950 年台からとされ、その歴史は比較的浅い。表 1 に見られるように、開発についての考え方は、援助側の技術適用を中心とした経済的成長の重視から環境や福祉を重視する持続可能な開発へと変わってきた。70 年台末には、開発の経済的側面重視に対する批判が起こり、80 年台は「開発の後退」が起こったとされる。当該社会のニーズの把握や参加型開発といった考え方もまた、一方的な開発の失敗とそれへの批判への対応として創造されてきたやり方であろう。しかし、援助国から被援助国へ（先進国から発展途上国へ）の介入が前提とされる以上、「ニーズ把握」も「参加」もより望ましい「開発」を目指し、より効果的な「開発の方法」を模索するという点で近代化理論の延長上にある。

開発の人類学では、個別の現場で行われる開発実践によってローカル社会にどのような変化が起こっているのかについて報告と議論が行われてきた。しかし、足立明（2003）は、開発の「受益者」の経験と記憶は、ほとんど聞こえてくることもなく、昨今の記憶の問題系においても議論されることはなかったと述べている。

また、内山田康（2003）は、開発援助のプログラムが、場所や文化に関係なく一律で合理的な形で転写されてきたと批判的に述べる。

開発のプロセスの只中では、フォームだけが、あるいは開発の図式の転写の繰り返しだけが記憶されている。（中略）ケーララ<sup>1)</sup>という固有の歴史性をもった重層的な現象およびその多様な経験は、比較、翻訳可能で事実性をもった普遍的介入モデルへと作り替えられる必要性があった（内山田 2003：453）。

表 1 開発についての考え方の変化

1950～60 年代	経済成長と近代的科学技術の適用が優先される近代化理論
1970 年代末～	公正をとまう成長、成長をとまう再分配
1980 年代～	物質的福祉とともに社会的福祉の改善、開発の持続可能性
1990 年代～	環境問題の重視、地域特有の環境と社会の最貧層のニーズに基づいた開発

ジェニファー・エリオット著、『持続可能な開発』より作成

1) 「ケーララの奇跡」は、ケーララモデルとして経済的発展なしに達成された社会的発展のケースである。

翻訳可能な普遍的介入モデルとして作り変えられた開発の図式は、対象とする社会のローカリティに関係なく、被援助国へと転写されることになる。

藤倉（1996）は、ネパールを事例に、被援助国の文化が開発に与える影響を指摘した、リンダ・ストーン（1989）の議論<sup>2)</sup>を批判的に取り上げ、文化は開発にとって重要な問題であるというリンダの主張は認めつつも、「開発目標においては文化は保護されるか変化させられるべきである」と文化を変化しない「こと」としてリンダが定義している点を問題視している。

以上の議論から明らかになるのは、文化は開発にとって重要な問題であるということは認識されつつあるが、実はその「文化」の中身が見えてこないという現状ではないだろうか。つまり、開発の対象地となった場所において、実際に文化はどういった変化を迫られてきたのかを個別具体的な事例から明らかにする必要があるということである。

本稿では、以上のような問題関心から、ネパール・キルティプル市における家庭ごみに関する管理プロジェクトを取り上げ、当該社会の生活レベルでの文化変容について論じる。

### 3. ネパールにおけるごみ問題と援助

#### 3.1. 調査対象地の概要

ネパールは、2008年に王制が廃止され共和制に移行した。面積14.7万平方キロメートル、人口2,662万人(Intensive Study & Research Centre, 2010)で、1991年から2001年の平均人口成長率は2.25%と非常に高い。国内には45の民族(Adivasi/ Janajati)がいるとされるが、実際は100以上のカースト、エスニック・グループが存在している(National Statistics Indigenous Peoples 2006)。また、主な宗教としてヒンドゥー教(80.62%)、仏教(10.74%)があげられるが、対立的な関係ではなく双方の神が生活のなかに溶け込み、独自の世界観をつくりあげている。

本稿で事例地とするキルティプルは、「栄光の都市」という意味の名をもち、カトマンズから南西7キロに位置する。中心の旧市街を頂点として丘陵地状に市街地が拡大されてきた。キルティプル市には9,487戸40,835人が住み、人口の約65%がネワール(族)である(Census 2001)。2010年の人口予測では6万人以上とされ、今後も急激な人口増加が見込まれている。

現在のキルティプルは、1992年に区分された8つの村落開発委員会(VDC=Village Development Committee、Palifal、Layaku、Bahirigaun、Chithubihar、Champa Devi、Bishnudevi、Balkumari、Chobhar)が1997年に統合され、14.79平方キロメートルの市となった。市は19の区(ward)に分割されているが、住民たちは、かつての城壁に囲まれた居住区を指して「キプー=Kipu(Kirtipur)」という。また、この旧市街地内はトール(tole)と呼ばれる地区ごとに居住空間が構成され、様々な活動や祭りなどの宗教儀礼もこのトール単位で担われる。

本稿で取り上げるのはこの「キプー(Kipu)」と呼ばれる旧市街地である。13世紀ごろできたと

2) リンダ・ストーンは、「コミュニティ参加の言説は、西洋個人主義と平等の文化的価値を反映している。逆にネパール地域社会は、ヒエラルキー、人との相互依存、人間関係や社会ネットワークを介しての行為によって動いている。多くの村人やローカーストの人々は、外側の世界とつながることが意味のあるという認識を欠いている」と延べ、ネパール(被援助国)の文化が開発に与える影響を指摘した。

されるこのまちは、ラナ家による専制支配が終焉した 1950 年まで、人々の生活は周りを城壁に囲まれたエリア内のみに制限されていた。その後の開発により居住エリアは拡大し、壁も一部を除いて取り壊されたが、旧市街地ではネワールの伝統的住居や独自の生活文化を色濃く残している。居住者は一部の例外を除いてすべてネワール族である。

### 3. 2. ごみ問題の発生と援助

ネパールでは、1956 年以降の開発政策において、援助依存率が 60%～70% に達する高外国依存の状況が続いている。この国では、1951 年にラナ家による閉鎖的な専制政治（1846–1950）が崩壊して以降、様々な国や国際機関、NGO が実験的な支援活動を開始した。「手つかずでまっさらな」開発途上国であるネパールを、多くの外国が「開発の実験場」と呼び、彼らの持つ理論や知識をこの国で試したいと望んだ（Fujikura 1996）のである。

ネパール王国政府による都市廃棄物処理事業は、1980 年から首都圏で実施されてきた。ネパール–ドイツ二国間協定に基づき、GTZ (German Technical Cooperation) による事業“Solid Waste Management Project”が断続的に行われてきた。また、JICA (Japan International Cooperation Agency) も共同で都市のごみ処理問題に関わってきた。

キルティプルには、旧市街地の東側丘陵地には、3 つの儀礼用水源（Laxmi Ga :、Buin Ga : Cha、Bagh Bhairab Ga :）を含む 20 箇所以上の池や井戸、石水道がある。石で作られた水道はヒティ（Hiti）またはガー（Ga :）とよばれ、新しく開拓されたナヤバザール（Naya Bazar）などに移住してきた人々は、こうした水源から生活用水を汲む。ヒティやガーは、地域の有力者や富裕者が寄進するなどして建設されたものであり、住民は無料で利用することができる。

だが、近年になってヒティやガーからの水が枯れ始めるという事態が起こる。20 リットルの容器に水を汲むのに 1 日かかったり、水質が悪化するなどの問題が発生した。こうした現象の原因は明白ではないが、一つはキプーの住人が儀礼用水源のある丘陵地に放棄する家庭ごみによるものではないかと考えられた。

この丘陵地の上部にはガレ（Gale）と呼ばれる場所がある。ガレはまちの境界であり、ごみを捨てたり排泄をする場所として利用されてきた。現在では、旧市街を覆っていた城壁は取り壊され、その下方に道路や市街地が形成されているが、かつては城壁の外にはジャングルが広がっていた。キプーの住民はごみを捨てても生活に支障をきたさない場所としてガレにごみを捨てていたのである。その上、家庭からでるごみは住居に併設されたサガー（Sa : Ga :）やナウガー（Nau : Ga :）で堆肥化されていたため、「ごみ」として排出されるものは非常に少なかった。また、カースト規範にもとづいた清掃人であるポレ（Pore）たちがごみの処理や清掃を担っており、ガレにごみを捨てても問題化しなかった。

ネワールの人々は、ごみを捨てに行くことを「ドゥワンセマ」と言う。「ドゥワンセマ」とは、ネワール語で直訳すると「土をまく」という意味である。つい 20 年ほど前まで、生活のなかででた「ごみ」は「不要なもの」ではなく、土に還り再び畑にまくための重要な「資源」だった。「ペットコケット、ケットコベット（＝腹のための畑、畑のための腹）」と言われてきたように、ごみや糞尿は単なる不要な「ごみ」ではなく廃棄物問題として問題化され意識化されることはなかつ

た。しかし、後述するように、こうした生活システムは多くの都市で崩壊していくことになる。80年代以降、プラスチックゴミや使い捨て商品がインドや中国から大量に流入し、消費されるようになった。特にカトマンズ市やパタン市のような都市部では、畑に還されるべき「土」は単なるゴミとしてビニール袋に詰められ、週に2、3回循環する市の回収トラックに放り投げるのが当然のようになってきたのである。

ごみの処理場としては、1980年代後半にはカトマンズ盆地内で収集したごみを集める3箇所の分別場がつくられ、1986年にはカトマンズ市街地から北東約6キロに最終処分場であるゴカルナ埋立地が整備された。2005年からは北西約10キロにあるシスドル最終処分場が使われているが、埋立地周辺の住民による反対運動やガソリンの高騰・不足によるごみ回収停止が起これば、地域のごみはすぐに溢れ、行き場を失ってしまう。

以上のような、伝統的生活システムの崩壊とごみ問題の発生、廃棄物処理施設の建設の過程には、少なからず国際支援やNGOなどによる生活改善プログラムが関わっている。住民を対象とした公衆衛生やごみに関する生活改善プログラムは、どのようにして行われているのか、また現地の人々はどのように新たな「知」を受け入れ、自らの伝統的「知」を改変し組み立てなおしてきたのだろうか。より具体的に言うならば、80年代から現在にかけて「ごみ管理プログラム（Waste Management Program）」としてパッケージ化され行われてきた援助によって、サガーやナウガーの利用や人々の「ごみ」に対する感覚はどのような変容を迫られてきたのだろうか。

## 4. キルティプルにおける生活改善プロジェクト

### 4.1. ごみ管理プログラム（Waste Management Program）

ここでは、GTZ（German Technical Cooperation）とUdle（Urban Development through Local Effort）の開発プログラムをもとに、キルティプル市役所とJICAが実施した研修を取り上げる。“Solid Waste Management”は1980年からネパール全土で断続的に行われてきた。キルティプルでも、2004年から住民の意識改革を目指した研修プログラムやプラスチックゴミの分別収集が実施された。しかし、ごみの分別や収集が人々の生活に浸透するのは簡単ではなく、「ごみを道端に捨てる」「家庭ごみをガレに捨てる」という習慣が完全になくなることはなかった。ここでは2009年に旧市街地の住民を対象に行われた研修の内容とプラスチックゴミの収集活動を紹介し、こうしたプログラムが「ごみ」に関する意識や行動をどのように変えようとしてきたのか考察してみたい。

#### 4.1.1. プラスチックごみの分別収集

キルティプル市役所では、青年海外協力隊（JOCV）のサポートを得て、月に1度5ガテ（ネパールの暦で5日をさす）に、旧市街地を回ってプラスチックごみを回収するというプロジェクトを実施している。旧市街では収集業者の大きなトラックが路を通れないため、小さなトラクターを別に雇いこうした活動をしており、市役所職員1名、JOCV1名、収集車を所有する業者1名、運転手1名、作業員2名で行い、旧市街地のすべての地区を巡回し、ごみを回収する。ごみは①ミルク・油などの袋、②ビスケットなどの菓子袋、③黒いビニール袋の3種類に分けて収集し、②以外はリサイクル業者に販売される。各トールの収集量は記録され、販売利益の一部はトールに還元され

る。

プロジェクトでは、スイロ（市民は2ルピーで購入、市役所が5ルピーを負担）というかぎ針状の道具を使って、プラスチックごみの分別収集を推進するが、多くの女性は、ごみを時間どおりに分別して持ってくるということに慣れず、収集にかなりの時間がかかってしまう。

また、業者による収集は、祭りやデモなどによる交通規制が起これるとすぐに延期されたり中止されたりしてしまう。慢性的なガソリン不足や携帯電話の不通などにより、収集業者が来なくなったりすることもよくある。

さらに、ごみの分別収集の難しさは、人々のジュット（ケガレ）の感覚に拠るところも大きい。今の30代の人でも、幼い頃、両親からごみは持ち帰ってはいけないと教えられたといい、ピクニックに行っても食べたあとのものはすべて新聞にくるんで置いてくるのが当然とされている。家にケガレを持って帰ってはいけない、ごみは清掃カーストが片付けるものだという感覚が消えずに残っているのである。

2004年にはJICAの支援によるプラスチックゴミ収集場の建設が計画されたが、周辺住民の反対にあい、計画は中止されるということもあった。「プラスチックだからにおいもしない」と説得しても受け入れてもらえなかったという。プラスチックの容器がネパール社会に浸透してから、たった20年ほどしか経っていない。旧市街に暮らす人々にとって生活のなかで新たに生じた、プラスチックを含む「ごみ」もまた、ソトに捨てるものであり、清掃人カーストという「他者」が片付け綺麗にするものだとして認識されてきたのである。こうした意識を変えるべく行われたのが、次のような研修プログラムであった。

#### 4. 1. 2. 家庭ごみの堆肥化研修プログラム

旧市街地を対象に行われた、この家庭ゴミ管理研修プログラム（タリム）では、2日間の研修期間中、48の研修が行われた。研修には、女性1568人、男性11人の計1579人が参加した。主催・運営はキルティプル市役所であり、現地の若者約10人がローカルボランティアとして、またJOCVとして1名がこのプログラムに関わっている。

プログラムの目標は、「市民のポジティブな意識改革をし、ごみの発生源から減らす（キルティプル市役所2009）」ということであり、より具体的には、次の通りである。①家庭からでるごみを減らし、家の前、トール、バザールなどが汚れないよう汚染から守る。②植物を育てるのに必要な肥料は自分のうちから製造し、畑に使うという意識を高める。③「一人にとっていらぬものは他の人にとって財産になる」という、住民の意識を高める。④ごみ収集のあとのごみ処理場の使用期間を長くするため、環境を良くする。こうした目標が設定されている。

1日目は、環境についての説明（水、空気、土の汚染、騒音、風景の汚染）やごみの概念についての講義が行われ、ごみに対しての人々の態度、市役所の現状、ゴミの発生のなかで家庭ごみの管理はどのように行うか、ごみの種類にはどのようなものがあるかなどが教えられる。

研修は、講義だけでなくワークショップ形式で行われ、ごみとは何かという質問に対して様々な答えがあがっている。野菜くずやプラスチックごみが挙げられるが、その中には食べ残しという意味での残飯はでてこない。食事をつくるときには「食べ残し」がでないよう準備しなくてはならないと考えられていることによるのだろう。

「ごみとは何か？」

古い靴、古い布、古いボラ（袋）、不要な電球、ビンの破片、古いバッグ、じゃがいもの皮、にんにくの皮、卵の殻、果物の皮、キャベツの外の皮、大根の葉と皮、陶器の破片、古い紙、ラーメンの袋、藁、黒いビニール袋、埃、臭い匂いのするもの、使った紅茶の葉、雑草、ミルクの袋、油の袋、コーラのボトル、古くなったご飯（バシ カナ）、食パン、ビスケットの袋、大便、小便、鼻水、レンガの破片、灰、雑草、鶏の糞、骨、葉の箱、籾殻、犬の糞、腐った野菜、どくろ、適した場所がないもの、使用されていないもの、不要なもの、無駄な出費、財産はなくなる、災害はなくなる

キルティプル市役所（2009）資料より作成

2日目には、誰が捨てたごみか、そのごみがどこから来るのか意識化することを目的として、女性サムハ（グループ）でトールごとのごみの量と種類を数える。自分の家から出るゴミを分別すると75～90%が有機ゴミであることから、それらをどうすればよいかを考える。そして、堆肥化の有効性を教唆する。コンポストの定義、ごみ管理の必要性、利点、注意点、自然の菌を入れると早くできることなど、様々な方法での堆肥化を紹介する。また、「まちを綺麗にするのは自分たちの責任」という歌をつくって歌い、研修は終了する。

この2日間の研修終了後、797人がコンポストビンを受け取っている。コンポストビンは700ルピーだが、市役所が400ルピーを負担し、住民は300ルピーを支払ってボトルを持ち帰ることになる。

研修への参加は、そのほとんどが女性であり、女性の積極的な参加や活動が期待されている。それは、日常的に家庭ごみに関わるのが女性であること、また男性は新しいことをすぐには受け入れないといった性質があるからだとされる。しかし、そもそも「ごみ」の堆肥化はほとんどが農民カースト（ジャプー）である彼らの生活には欠かせないものであり、既存の「生活知」であるはずである。だが、既存の知であるということにはいっさい触れられることはなく、ごみの堆肥化は「新たな知」として再導入される。参加した女性が、「これまでに考えたこともなかったことを習い、新しい考え方を知った」と言うことから分かるように、コンポストによる堆肥化はネワール社会の文脈と関係づけられることなく、ソトから持ち込まれた「新たな知」として提供されるのである。

ネワール社会においては、家庭からでる「ごみ」は明確に区分され、それぞれ捨てる場所も決められていた。食べ残しを含む台所ごみはサガー（Sa: Ga:）へ、藁を燃やした灰や尿はナウガー（Nau: Ga:）へ捨て、土と混ぜて肥料を作ったり、清掃人カーストであるボレの人々に取りに来てもらうたりしていた。このように、「ごみ」は単なるごみではなく、様々な「穴」を介して他者へと受け渡されていくモノであった。しかし、本章で見てきたように、世界中で通用する生活改善プロジェクトでは、現地における「ごみ」の多様性は包摂され、「ごみのリサイクル」というパッケージ化された新たな知が教唆、導入される。そして、ネワール社会という文脈における「ごみ」は脱文脈化され、援助側の論理体系のなかにある普遍的な廃棄物へと回収されていくのである。本章では、ネワール社会から「ごみ」を捉えるため、「肥料の穴」であるサガーと「灰の穴」であるナウガーの利用について見ていく。



## 5. 伝統的住居における「穴」の利用と変容

本章では、サガーとナウガーという場所の利用とその変容について述べる。ここでの記述は主に、ネパールの現地調査機関 VFSO による 2009 年のキープー全戸調査および、筆者が実施した 2011 年 9 月と 2012 年 3 月の追加調査、ターナニ・トール (Tanani Tole) とシンドゥワ・トール (Sinaduwa Tole) での聞き取り調査を元になっている。

### 5.1. SA : GA : の利用と変容

サガーとは、直訳すると「肥料の穴」という意味で、都市部（住居が密接して立ち並ぶ都市的な場所）においては、その多くは住居に併設されている。家の裏庭に作られた私有のものと、2、3 軒が共同で使用する共有のものがあり、これらは住居の内部と外部の中間につくられている。また、4 軒以上の住宅に囲まれた公共のサガーもあり、これらはほとんどの場合、住居の前面がサガーに面している。

サガーには土が入っており、肉以外の食べ残しやラプティと呼ばれる木の葉でつくられた皿、家を清めた後のごみも捨てる。食後、ごみはすぐに最上階にある台所から階下へと移され、サガーに捨てられる。かつては最上階にある台所からパイプが伸びており、洗いものをしたあとの水も直接サガーに流していた。時々土をひっくり返して混ぜ、乾期に取り出して乾燥させてから田畑に蒔く。

ネパール社会においては、食べ残しに対する強い忌避感覚がある。一度手（唾）を付けた食べ物や飲み物、皿は「ジュット ラゲコ（穢れた）」とされ、基本的に他者に触れたり触れられたりすることは忌避される。そのため、給仕する人は全員の食事が終わった後でないと自分の食事をとることができない。

サガーにはジュット (Jutho) となった食べ残しを含め、「なんでも捨てる」というが、日常的な食事ではほとんど食べ残しは出ない。古くなった食べ



写真 2 ターナニ・トール (KIRTIPUR 1994 より抜粋)



写真 3 サガー

物（バシ・カナ）はあまりよくないとされ、食べ残しが出ないように料理を作ることがよいとされている。したがって、多くの食べ残しができるのは、ボウズ（Bhoj）と言われる宴会のときである。ネパール社会において、ボウズは大変重要視されており、ヒンドゥー教や仏教の伝説に基づいた祭りや儀礼、家族の通過儀礼や結婚、年祝いの際には数日にわたって宴会が開かれ、多数の親類や近隣住民、友人を呼ぶ。こうした宴会で出たごみは、骨や肉は鶏や犬に食べさせ、その他はまとめてサガーに捨てる。畑にまく際には、乾期にサガーから中身を取り出し乾燥させる。乾燥させることによってジュットの食べ残しはジュットではなくなり、肥料として使用することができるからだという。かつてはボレたちを呼び、サガーの中身を取り掃除してもらっており、30～40年ほど前には、大きな水牛の骨を使ってサガーの中身を取り出していた。

現在では、ある程度カーストに束縛されずに職業を選択できるようになったことや、大規模農業をする人が少なくなったことなどから、ボレの人々がサガーに関して仕事をするとはほとんどなくなったが、かつては日常的に被差別とされる人々を家に呼び入れる機会ともなっていた。サガーがある場所は、完全な住居の内部でもなく外部でもない。穀物を干したり酒を作ったり、人を呼んで宴会をしたりするような空間と併設されていることが多かった。サガーという「穴」は、他者を呼び入れ関係を築く場でもあったのである。

## 5.2. サガー利用に関する変化

キルティプルにおける2009年の調査では、旧市街地の約150から200軒のうち、約30のサガーが使われていたが、2011年に使用されているサガーは半分に減少していた。聞き取り調査を行った結果、これまでにサガーを使っていた家のうち、約85%がトリブバン大学などによる土地接收、約33%が下水道の敷設によってサガーが不要になったと回答している。また、家の建て替えの際に取り壊したり、兄弟の財産分与の際に住居を縦に分割したために、サガーがなくなってしまうこともあった。ここでは、人々はサガーの利用に関してどのように語り、サガーの存在をどのように認識しているか見ていく。

Aさん(60代 女性)は、「畑がたくさんあるときは肥料をつくってちゃんとしていたけれど、TU（トリブバン大学）に土地をとられてしまい畑がないので、もう使うという考えがなくなった」と述べる。こうした意見はもっとも多く語られ、国立大学建設という国家プロジェクトのために土地を悪条件で接收されたことに対する不満や怒りは現在でも根強く残っており、農地の接收はサガーを使わなくなった大きな原因であると言えよう。

一方で、現在でも広い土地を持っているというB家では、サガーは毎日使われている。マーズ月（1～2月）には水があまりなくサガーの中身が乾燥するので、堆肥化したものを取り出して畑に持っていく。B家ではサガーだけでは肥料が足りず、コンポストビンも使って肥料を作っている。「サガーはオープンスペースになっているので、あまり臭いはないし、どんなものをいれるかよく知っているの、臭くはならない。市役所の人も見に来たが、ここの家には土地があるので肥料が必要だから、サガーが大事だと認めている」という。B家の話から分かるのは、土地があればサガーは利用価値が高いということである。サガーは台所からでるものはすべて肥料にすることができ、その肥料をととても大切に使っていた。

以上のような語りから、サガーの利用に関して市役所のチェックがあったということは明らかである。逆に、市役所のチェックによってサガーの利用を制限されたという家もあった。Cさん（60代 女性）は、「市役所はサガーは必要ないというが、まちの内側は下水道が整備されていないので、排水のために使っている。今はゴミを捨てるためにもお金を払わなくてはならないし、お金のない人は困っている」と語り、サガーが不必要とされながらも、それに変わる整備にむらがあることへの不満を漏らしている。



写真4 かつての公共のサガー

Cさんの話からも分かるように、サガーが利用されなくなったのは、土地の接収だけではない。公衆衛生の改善を目的とした開発プロジェクトによって選ばれたサガーは、レンガや石で埋め立てられ改修されていったのである。

ここは9件の家が共有するサガーでしたが、25年ほど前に First plan（ネパール王国政府による開発プロジェクト）がきて市役所が材料をだして埋め、レンガを敷き詰めました。前はとても汚くみんながトイレをしにくところだった。43年前お嫁にきたときにはサガーとサガーに続く道は排泄物だらけで、きれいな服を来てお嫁に来たのに、うんこだらけの道を歩かなくてはならなかった（大笑しながら）。私もここでしたことあるよ。でも、だれかがお嫁にくるたびにきれいにしたんですよ。ボレに頼んで1ヶ月に3回くらいそうじをしてもらっていました。サガーがなければ、人が集まることもできるし、ボウズをすることもできるから、話し合って、やめましょうということになりました。（60代 女性）

改修される以前のサガーは、堆肥化のみならず様々な多重的機能をもつ「穴」であったことが分かる<sup>3)</sup>。また、人々のなかには、一時はサガーを埋めてしまおうかと考えたが、「蛇が通る道」<sup>4)</sup>として残っていて、子どもが病気になったときにはそこにプジャ（祈祷）をするという話もしばしば聞いた。

先に述べたように、家庭ごみに関する研修やコンポストビンの配布プロジェクトは2009年から実施された。以前にもこうしたプロジェクトはあったが、ほとんど浸透しなかったという。コンポストビンを持っていて使っているというDさん（50代 女性）は、市役所で研修を受け、野菜の

3) このサガーは広く壊された後も共有の空間として使用されている。

4) ヒンドゥー社会において蛇は水の守り神として崇拝されている。

切りくずなどを捨てて大事に使っている。しかし、Dさんは、「ジュットのはコンポストビンには捨てない。入れると、それを抱えた人もジュットになる」といい、サガーの利用とは明らかに異なる制限された使い方をしているのである。

コンポストビンは、当初、屋上にある台所に置いて活用することが推奨されたが、神聖な場所とされる台所にごみのはいったボトルを置いておくことなどできない、しかもジュットのものを入れることなどできないと考えられることが多い。キプーにおいても、コンポストビンにはジュットのものを入れず、かつ台所には置かずに家の前や裏庭に置いているところがほとんどである。

上記のような聞き取り調査から見てくるのは、サガーが堆肥化や排泄、ボウズの場所といった様々な用途に転換可能な「穴」であったということである。サガーは、単に食べ残しを捨てて堆肥化するだけのものではなく、肥料を「生み出す」場所であり、他者との付き合いや、そのための準備、穀物の乾燥、排泄、祈祷など、生活の様々な場面で利用されてきた多機能な場所であった。しかし、トイレの設置やコンポストビンの導入により、その機能は奪われ、単純化されていくことになる。

### 5.3. NAU: GA: の利用と変容

ナウガーとは、「灰の穴」を意味する。ほとんどが住宅の1階（Cheli）の階段下に設けられている<sup>5)</sup>。ここでは、藁を燃やした後の灰と尿をまぜて「ナウサー」といわれる肥料をつくる。現在では、日常的に藁を使って調理することはなくなったが、儀礼食であるチュウラ（茹でて潰した米を乾燥させたもの）やロキシー（米から作った蒸留酒）、チャン（米などの穀物からつくった非蒸留酒）などをつくる際には藁を使うため、一年に数回、ほそぼそと利用されている。また、高齢者は、住居の外に作り付けられたトイレに行くのが面倒で、今でもナウガーに排尿しているという。かつては、上の階からコブラ（Cobra）という入れ物に排尿をし、1階に持ってきてナウガーに捨てていた。できた肥料はミー（Mi, Mitha）という袋（麻からナイロンへと素材は変化）にいれて畑まで運んでいた。酒を作るときにできる藁を燃やした灰をナウガーに入れると、土が柔らかくなっていい肥料になると考えられている。



写真5 ナウガー

### 5.4. ナウガー利用に関する変化

ナウガーは住宅の中にあつたため、トイレを

5) ネットワークの伝統的な住居は4階建てで、上階にいくほど聖なる空間と捉えられている。

作ったり家を改修したりすることで潰してしまうことが多く、サガーに比べ残っている数は少ない。ターナニ・トールとシンドゥワ・トールの住民の約 40% が、公衆衛生の改善指導や下水道の完備によりトイレができたことで、ナウガーが不要になったと回答した。また、調理用のガスが普及し藁を使わなくなったので、ナウガーも使わなくなったようである。一方で、「ナウガーではとてもよい肥料ができ、稲を育てるためにはその肥料が必要だ」という声も多く聞かれた。

### 5.5. ごみの穴と生活

サガー・ナウガーという「穴」は、郊外の農村では全く別の形態をしている。住居から離れた位置にあり、簡単に周りをレンガで囲っただけのものや、山盛りに盛られ、その上に藁やビニールをかぶせただけのもの、家畜の糞に藁をかぶせたものなどで、これらはガー（Ga: = 穴）とは呼ばれない。本稿で取り上げたようなサガーやナウガーは、キプーのように密集した住宅環境で暮らす都市の農民（ジャプー）に特有の生活に必要な場所であると考えられる。都市生活において、サガーは、清掃人カーストであるボレを呼び入れたり、ボウズをひらいて多くの人を呼び入れたりするなど、「他者」との関係を生む場であった。一方、ナウガーはボウズに必要な儀礼食を作ることで出る灰を捨てていたことから、「他者」との関係が維持されているからこそ使用されてきた場であると言えるだろう。

## 6. ローカル知の排除と利用

GTZ や JICA が行なってきたごみ管理プロジェクトでは、「家庭ごみを堆肥化する」という、一見、ローカル社会になじみやすいやり方であるかのように見える。しかし、ネワール社会の生活に根付いていたサガーやナウガーは生活改善プロジェクトにおいては不要とされた場所であった。プロジェクト実施のためのガイドラインでは、次のような記述がみられる。

廃棄物はしばしば野外に埋められる。これは酷い悪臭を引き起こし、ゴミをあさる動物や害虫を呼び寄せ、健康被害を引き起こす。（中略）人々が廃棄物を彼らの家の外、あるいは庭の内側にさえも捨てるのは非常によくあることである。彼らは、どのようにそれを取り除くのかという考えを持っていない。多くの人々が排水管へそれが押し流されるだろうと考え、廃棄物を埋めるが、実際は、廃棄物は排水管を閉じてしまう。

Urban Environmental Guidelines for Nepal (gtz, udle), 1992

人々への聞き取りでは、サガーやナウガーは「きたなく」で「くさい」から、もう使っていないという語りがよく聞かれた。しかし、これと同時に「大切に」「とてもよい肥料ができる」場所としても認識されていた。こうした語りの矛盾は、サガーやナウガー＝健康被害を引き起こす排除すべきものという生活改善イデオロギーによって引き起こされたものであると言えるのではないだろうか。サガーを日常的に使用している人は、「（援助機関によるごみや排泄物の堆肥化プロジェクトは）自分たちの考えと関係なく上からきたものだ」といい、プロジェクトを受け入れつつも自分た

ちのやり方で堆肥を作り続けている。

## 7. おわりに 文化の多層性の漂白

これまで、サガーやナウガーという住居に埋め込まれた「穴」に関する、人々の語りと実践について述べてきた。「穴」を媒介としてごみは養分となり、その場を媒介して他者との関係性が創出されてきた。「穴」にごみを投げ捨てる際にもそして取り出す際にも、いくつかの規範やタイミングがあった。そして、取り出して田畑にまいた後、食物の養分となって自身の生活へと戻ってくる、こうした循環は「ごみ問題」として問題化されることのない、生活文化であった。

現在、キルティプルでは新たな計画が持ち上がっている。2009 年から行われたプロジェクト (GTZ と JICA による共同プロジェクトである CKV (Clean Kathmandu Valley)) の際、研修を受けたボランティアらが集まり<sup>6)</sup>、環境改善クラブ (Baddabaran Sdhar Samannya Samiti (environment improvement coordination committee)) が結成された。彼らはプロジェクトのフォローアップについて、月 1 回のミーティングを実施し、今後のキルティプルで何をしていきたいかを試行錯誤している。20 代の若者が中心で、女性 7 名、男性 1 名である。

彼らは、コミュニティレベルで何かするとしたら、新しいことをさせるのがよいと考えている。いま進行中なのは、コミュニティレベルで大規模のコミュニティ・コンポストをつくるというプロジェクトである。20～25 人くらいでグループを組織し、200 平方メートルくらいの場所を借りる。そして、トカリやドコと呼ばれるカゴに市場で安く買ってきた野菜くずなどを入れ、堆肥化させて売り、利益を出したいと考えているのである。彼らのアイデアは、ゴミ管理プロジェクトにボランティアとして関わった経験からくるものであり、ネパールの人々の支援プロジェクトに対する受け入れ方を顕著に表わしている。

こうしたコミュニティ・ビジネスとしての堆肥づくりは、ネパール国内で実際にいくつかの場所ですすでに行われている。つまり、だれでも始めることのできるどこでも可能な「ガー」なのである。この持ち運び可能なアイデア、「コンポスト・ガー」は、これまで見てきたような重層的で多様な意味や機能をもつサガーやナウガーとは全く異なるものである。異カーストという他者との関係性創出の場でも、ネワール社会になくってはならないボウズを開く場にもなるといった多層的な場でもなく、肥料を作って売るといった単一的な機能をもつ空間である。これまでのキルティプルの旧市街地におけるゴミ管理プロジェクトは、このように生活文化を無視してきたのではなかったか。そしてその結果として、サガーやナウガーが内包する機能の多層性は失われつつあるのではないだろうか。

援助という「善」の介入によって、サガーやナウガーという場は無視され、伝統的な「ごみ」処理のシステムは変容してきた。「啓発」「意識化」「知識」というパッケージ化された生活改善プロジェクトは、他者との関係を取り結ぶ場も排除した。人々は自分たちの出したごみを自分たちで処

6) プロジェクト当初は 6 ヶ月間、コンポストビンのモニタリングをしていた。手当として GTZ から一人 1,500 ルピーを受け取った。

理しようとは考えなくなり、最終的には行政や市場サービスに依存することになった。つまり、本稿で述べてきた生活改善プロジェクトは、ネパールにおいて、社会経済的な援助依存だけでなく社会システムの「依存」もやむなくしたのである。

90年代以降、開発支援はそれまでの経済、インフラ重視の開発から、「住民参加」や「内発的発展」、「ローカルなニーズ把握」を重視するようになったが、これらはすべて「開発」と同じ論理の延長上で語られてきたのではないだろうか。

本稿では、ごみ問題の解決を目指して行われる生活改善プロジェクトが引き起こす、ローカル社会の生活変容について検討してきた。フィールドから見えてきたのは、ごみの脱文脈化と一元化によって、新たな生活問題が起こっているという現状である。外部からの介入によるトイレや下水道の設置、啓発活動によって、排泄物や有機ごみは単なる「廃棄物」と位置づけられた。それは結果的にネパール社会において成り立っていた生活文化の循環を断絶し、生活環境の悪化や不平等感を生むことにつながったのではないだろうか。

こうした、外部からの知の介入である生活改善プロジェクトは、戦後日本における農山漁村でも行われた経緯がある。今、グローバル規模で行われる生活改善プロジェクトでは、日本の農山漁村の経験は「成功」として捉えられている。生活を合理化し近代化するために、「衛生問題」「非合理性」の解決は急務であった。しかし、生活改善の思想は、コミュニティ（当該社会）に埋め込まれていた個人の欲望を再編し、大規模開発を受け入れる素地をつくりだしたのではないか（葛西2008）という点はあまり検討されてこなかった。「不衛生」とか「非合理的」なものとして一元化され脱文脈化されてしまった生活文化（民俗）は、結果としてその社会そのものを崩壊させる端緒となる可能性がある。少なくとも援助という介入によって起こる文化の脱文脈化に関して、援助を行う側としても十分に留意しておくことが必要であるし、そうした点こそ日本の経験に学ぶべき点ではないだろうか。

## 参考文献

- 足立 明、2003、「開発の記憶－序にかえて」『民族学研究』67(4)、pp.412-423.
- Amrit R. Vajracharya, 2009, *Study on water sources of Kirtipur*, Vfso. (未出版)
- Fujikura, T, 1996, *Technologies of Improvement, Locations of Culture : American Discourses of Democracy and "Community Development" in Nepal*, Studies in Nepali History and Society, 1(2).
- Intensive Study & Research Centre, 2010, *District & VDC Profile of Nepal*, Intensive Study & Database of Nepal.
- ジェニファー・エリオット著、古賀正則訳、2003、『持続可能な開発』、古今書院.
- キルティプル市役所、2009、『「家庭ごみ管理研修」第一段階キルティプル地区 ローカルな努力をベースとした技術支援』、Udle（都市開発プログラム）・キルティプル市役所.
- 葛西映吏子、2008、「生活改善と「村」の生活変容」、山 泰幸・川田牧人・古川 彰編、『環境民俗学——新しいフィールド学へ』、昭和堂.
- 国際協力事業団、1994、『ネパール王国 都市環境分野 プロジェクト形成調査報告書』、国際協力事業団.
- Mehrdad Shokoohy, Natalie H. Shokoohy, 1994, *KIRTIPUR : An Urban Community in Nepal, It's People, Town Planning, Architecture and Arts*, Araxus Books.
- Nepal Tamang Gedung, 2006, *National Statistics & Indigenous Peoples*, Nepal Tamang Ghedung, Central Secretariat, Jagadamba Press.
- 日本工営株式会社・八千代エンジニアリング株式会社、2007、『ネパール国 カトマンズ盆地 都市廃棄物管

- 理計画調査（モニタリング・フォローアップ）』、ネパール国地方開発省・独立行政法人国際協力機構。  
Stone, Linda. 1989, *The Cultural Crossroads of Community Participation in Development: A Case from Nepal*, *Human Organization* 48(3).  
内山田康、2003、「開発の二つの記憶」『民族学研究』67(4)、pp.450-477.  
山上亜紀、2007「“ゴミ”の誕生－ネパール・カトマンズ盆地における家庭ゴミ堆肥化プロジェクトと不浄観」、阿部年晴 他編『辺縁のアジア－“ケガレ”が問いかけるもの』、明石書店。

#### 電子資料

- eKantipur, (Retrieved July 12. 2012, <http://www.ekantipur.com/en/>) nepalnews.com (Retrieved July 12. 2012, <http://www.nepalnews.com/archive/nepalnewsmain.php>)

#### 謝辞

調査にご協力いただいたキルティプル市の皆様に深く感謝申し上げます。

本稿は、先端社会研究所リサーチコンペ研究助成を受けて実施した調査成果の一部です。このような機会をくださいました研究所の皆様にもこの場を借りまして御礼申し上げます。



# Packaged Development Aid and Life Change Concerning the “Hole” of Garbage: A Case Study of Livelihood Improvement Project in Kirtipur, Nepal

KASAI, Eriko  
(Kwansei Gakuin University)

## Abstract

This paper describes the life change of local society that the livelihood improvement project about “garbage problem” causes in Federal Democratic Republic of Nepal. Although the problem of “garbage” is a problem that causes a universal environmental damage and physical damage, the source of the problem is closely concerned with a social cultural background. However, Waste Management Program developed all over the world disregard the context of local society. What did the project change in the local society, and how did local people accept these projects, and what did these projects bring about? In this case study, there are SA : GA ; and NAU : GA : in local house in Kirtipur City, old town. SA : GA ; and NAU : GA : are “hole” which have various norms and functions. But these projects as “Waste Management Program” has understood this “hole” only as “dirty” and “garbage problems”, and bleached the multilayer functions which the “hole” had. That is, the livelihood improvement project in Nepal has carried out not only economical dependence to international assistance but dependence of a social system.

**Key words:** International aid, Livelihood Improvement, Living culture, Nepal